

Vol.5

下関市立大学 資料室だより

●発刊/2016.3.31 ●発行/下関市立大学附属地域共創センター



海峡の英知。未来へ そして世界へ。

公立大学法人

下関市立大学

Shimonoseki City University

〒751-8510

山口県下関市大学町二丁目1番1号

TEL 083-254-8613

FAX 083-253-1622

<http://www.shimonoseki-cu.ac.jp>

E-mail:chiikikyoso@shimonoseki-cu.ac.jp

資料室だより巻頭言

下関市立大学附属地域共創センター
センター長 難波 利光

地域共創センターでは、毎年鯨シンポジウムを開催しております。下関において鯨の研究は長年取り組まれており、研究はもとより資料の蓄積は膨大な物です。この様な資料は、全国から研究者のみならず市民からの関心も高く、興味を抱いている方も多くおられます。シンポジウムでは、このような積み重ねから多くの方にご来席頂きました。また、報告内容も興味いものであり、マルハ創業者である中部幾次郎に関する戦前の南氷洋捕鯨についての研究や中部家資料についての研究でした。

地域共創センターの研究は、地域の社会資源に関する研究を本学教

員のみならず多くの研究者と共に進めていくことが重要であると考えております。それ故、当センターの研究費により外部委託した委嘱研究員によるものも含まれております。研究は、多くの方々との連携が必要であり、学内だけの物に止まらないというオーブンスタンスが必要になります。

また、この様な研究志向は、中部家資料研究に見られるようにオーバルヒストリー研究を進めていく要因にもなります。これは、歴史の生き証人である方々にヒアリングすることで次の時代に真の歴史を伝えることができる貴重なものです。この調査方法は非常にテクニカルであり、これまでの人間的関係性や重厚な研究をしていなければできないものです。

これから多くの研究者や多くの市民の方々と地元の資源である地域資料を多方面から収集し共同で研究を進めることができるよう環境整備を進めたいと思っております。



資料



新着資料が並ぶ資料室

第8回鯨資料室シンポジウム

下関市立大学 経済学部 公共マネジメント学科
講師 松本 貴文

平成27年10月31日(土)、下関市立大学本館Ⅱ棟大会議室において、恒例となっております第8回鯨資料室シンポジウムが開催されました。今回は「マルハ創業者・中部幾次郎と戦前の南氷洋捕鯨を辿る～中部家資料を中心に～」と題し、林兼商店(現:マルハニチロ)の創業者である中部幾次郎が、明石の鮮魚仲買運搬業から身を起こし、南氷洋捕鯨にまで事業を拡大してゆく過程をめぐって、2つの研究報告と鼎談が行われました。下関の産業発展に多大な影響を与えた幾次郎がテーマということもあってか、当日は約60名の市民の皆様にご来場いただき、活発な議論や意見交換がなされました。

第1報告では、明石市立魚住東中学校教諭で幾次郎研究第一人者でもある片山俊夫氏が、「中部幾次郎～明石から「朝鮮」へ～」との題で、幾次郎が晩年の南氷洋捕鯨に至るまでに、どのように事業の基盤を固めていったのか、幾次郎の足跡を辿るフィールドワークの成果を交えつつ紹介されました。片山氏によれば、明石で鮮魚仲買運搬業の個人商店を営んでいた幾次郎は、大阪で開催された第5回内国勧業博覧会での経験をヒントに、石油発動機付鮮魚運搬船「新生丸」の造船や、ブライン式冷蔵庫の彦島などへの建設といった新機軸を打ち出し、林兼商店の事業を拡大・発展させて行きます。こうした展開は、工業の発展に伴う大都市の水産物消費市場の拡大や、漁業人口の増大による日本漁民の朝鮮進出といった時流を捉えたものでした。林兼商店の拠点を、朝鮮との結節点である下関市に移し、のちに朝鮮にも進出。半島南東部に位置する方魚津に朝鮮漁業の本拠地を置き、自身もそこに移住して朝鮮での基盤を盤石なものとします。こうして完成した土台をもとに、幾次郎は北洋漁業に乗り出しますが、政治的な壁もあり挫折。そこで新たにフロンティアを南氷洋に求めることになります。現在の明石、下関、方魚津などでのフィールドワークで採取した写真・資料等も紹介され、日本が近代国家として台頭してゆくなから、幾次郎の林兼商店がどのように事業を拡大させ、今にその痕跡を残しているのか、克明に語っていました。

第2報告では、岸本充弘氏が「中部家資料から見えてくるもの～林兼商店の黎明期を視野に～」という題で、本年度、中部家より鯨資料室に寄贈された資料をもとに、南氷洋捕鯨に向けて初の国産捕鯨船「日新丸」を建造した過程や、実際に行われた捕鯨の様子について語りました。岸本氏は、下関市農林水産振興部水産課に勤務されながら、下関市立大学附属地域共創センター委嘱研究員として研究にも勤しんでおられます。報告では、①昭和11年に建造された日新丸の積量図、②昭和11年～12年の南氷洋捕鯨で利用された海図、③昭和13年度の鯨油製造日計表、④昭和15年～16年の南氷洋捕鯨漁場日誌などの中部家寄贈資料のなかから、当時の南氷洋捕鯨についてどのようなことがわかるのか、日新丸を製造した川崎重工神戸造船所(当時の川崎造船)での聞き取り調査も踏まえて、詳細な解説がなされました。岸本氏によれば、戦

前の南氷洋捕鯨が鯨油の生産を主な目的としていたため、日新丸には鯨油の漏れ出した際に利用するオガクズの倉庫が設けられていたことや、昭和11年のはじめての南氷洋捕鯨の際には、漁場調査を目的にあえて船団を縦横無尽に走らせデータ収集を行っていたことなど、中部家寄贈資料によって重要な事が浮かび上がってきたそうです。当日は会場に中部家寄贈資料の一部も展示され、報告後の休憩時間には多くの来場者の方にご覧いただくことができました。

後半の鼎談では、報告いただいた片山氏、岸本氏に加えて、山口県立博物館で「山口県の産業～長門市・下関市の捕鯨関係資料～」の展示に携わられた経験をお持ちで、山口県立宇部高等学校教諭の佐藤嘉孝氏がパネリストとして登壇され、活発な議論がなされました。折しも本年(平成28年)は、幾次郎生誕150年、没後70年の記念すべき年でもあります。そこで、鼎談では「今、幾次郎を研究する意義とはなにか」、「中部家寄贈資料を含めた関連資料をいかに活用していくか」が論点となりました。

片山氏は、明石では既に幾次郎の記憶が失われつつあると指摘されながら、幾次郎の研究には、当時の時代の動きが見えてくるという魅力があると述べられました。幾次郎は、明石や下関市など、畿内や日本とその外を結ぶ結節点に拠点を置きながら、大凶漁や北洋漁業からの締め出しといった大きな壁にぶつかりつつ、事業を拡大していました。その過程は、日新丸建造に関する軍部の意向なども含めて、近代国家としての日本の拡大と深く関わるものでした。幾次郎はこうした時代の荒波のなかを、判断力や先見の明、子どもたちの協力などによって乗り越えていったと、片山氏は述べられました。

佐藤氏は、学校現場での教育や博物館での経験を踏まえながら、捕鯨など地域の歴史を、それを知らない若い世代にどう伝えていくか、そのためには、どう貴重な資料を管理し残していくかという点について発言されました。高校の教育現場でも地域の歴史についてほとんど知らない層が、生徒だけでなく若手教員にまで広がっています。そうした現状の中で、博物館のような施設が、資料の意味を掘り下げ、その魅力を上手く伝えていくことが上記の課題解決にとって重要なと佐藤氏は言います。そのうえで、中部家寄贈資料も一見してその意味を理解することが難しい資料であり、どのような構想の下で解説を加え、展示を行ってゆくかが非常に重要になると述べられました。

岸本氏は、議論の進行役を務められながら、下関市と捕鯨のかかわりという観点から、幾次郎研究や中部家寄贈資料の意味について発言されました。平成26年3月の国際司法裁判所の判決を受けて、鯨や調査捕鯨を取り巻く環境は厳しくなりつつあります。しかし、貴重な南氷洋捕鯨資料が発見されたことからも、下関はまさに「くじらのまち」のだという印象を強く持ったと岸本氏は言います。鼎談の最後には、こうした資料を次世代に伝えていくため、資料に関する研究を進めて行きたいと強い思いも語られました。

今回のシンポジウムでは、中部幾次郎の人生を辿ることをとおして、地域の歴史を研究しのちの世代に伝えて行くことの重要性が、あらためて明らかになりました。鯨資料室もその使命の一端を担うものとして、今後も中部家寄贈資料をはじめ鯨に関わる歴史や文化に関する資料の公開と情報発信に、力を入れて行きたいと思います。



片山俊夫氏



佐藤嘉孝氏



岸本充弘氏



会場の様子

中部幾次郎～明石から「朝鮮」へ～

明石市立魚住東中学校
教諭 片山 俊夫

1. 林兼の発展と朝鮮漁場

1866年、明石に生まれた中部幾次郎は家業の鮮魚仲買運搬業「林兼商店」(以下、林兼)を継ぐ。林兼は明石近海から五島列島の鮮魚を買付け、大阪難波港へ運ぶ。林兼が大きく発展する契機となったのが、第5回内国勧業博覧会(大阪)であった。彼はそこで石油発動機付の巡航船と大型冷蔵庫に注目し、機を見て事業化を図る。まず、1905年に石油発動機付鮮魚運搬船「新生丸」を建造する。それまでは帆と櫓による押し送り船であった。この時に資金を提供したのが大阪難波港問屋「綿末商店」の膳(かしわで)末次郎であった。1904年、幾次郎は下関に本拠を移す。朝鮮漁場進出のためである。朝鮮漁場と日本の市場を石油発動機付鮮魚運搬船で結ぶ。さらに、1922年には小型冷蔵運搬船を投入、1924年には彦島に大型冷蔵庫を建設している。

この時期の歴史的背景には、明治以降の工業発展に伴う大都市の人口増加と水産物市場の拡大、漁船の動力化・外国技術の導入による漁場の拡大、漁業人口の増加と漁場紛争の多発などによる瀬戸内海漁民の海外進出圧力の高まりがあった。そこに、日清・日露戦争による朝鮮半島海域への日本の権益拡大が重なり、小規模漁民の朝鮮「通漁」「移住」が盛んとなった。そして、その朝鮮漁場と日本の大市場を結ぶ鮮魚運搬業として、林兼と山神組が台頭する。いずれも難波港生魚問屋の強力な経済力を背景にしており、林兼は綿末商店(膳末次郎)と、山神組は神平商店(鷺池平九郎)と組んだ。



中部幾次郎氏功績碑前での記念写真、前列中央に幾次郎(方魚津在住の日本人撮影)

1915年、林兼は朝鮮漁

業本部を方魚津(韓国蔚山市)におき、幾次郎自身も移住する。翌年、危機が襲う。サバの大凶漁とコレラの流行。山神組をはじめ、多くの漁業者・運搬業者が朝鮮漁場からの撤退を余儀なくされた。そんな中、年末まで踏みとどまった林兼は時期遅れのサバの大豊漁とコレラの鎮静化により一気に他の業者を引き離す。こうして、朝鮮漁場での基盤を確固たるものにした。さらに、この頃から、漁業の直営にも乗り出すことになる。1924年、幾次郎は林兼を個人経営から株式会社組織にし、朝鮮漁場は有力な部下に任せ、1925年には下関に居を移す。それは、新たな事業の拡大をめざしたことであった。1928年、藍綬褒章の受賞を機に、明石公園に「中部幾次郎翁銅像」が建立された。幾次郎の水産業への貢献、明石への貢献が広く認められた証といえよう。

2. 方魚津と羅老島

林兼の朝鮮事業の当初の中心地は方魚津と羅老島であった。方魚津では、1928年に小学校校庭に「中部幾次郎氏功績碑」が、また幾次郎が推進した防波堤完成を記念する「防波堤築造記念碑」が建立されている。1929年末時点で、住民の約4割が日本人で朝鮮東南岸最大の漁港として栄えていた。まさに林兼の城下町であった。現在でも、所々に旧日本家屋が残っている。さて、二つの碑はどうなったのか?「中部幾次郎氏功績碑」は戦後取り壊されてなくなってしまった。



再設置された「防波堤築造記念碑」



戦前の方魚津を描いた絵画、防波堤記念碑・⑩の倉庫

いたが、小学校の改築工事中に石碑の一部が出土し、倉庫におかれている。また、「防波堤築造記念碑」は倒され防波堤下に放置されていたが、2009年に防波堤上に再設置され、歴史の証として保存されている。碑の背面には、「防波堤期成同盟会長 中部幾次郎」の字も確かに読み取れる。さらに、方魚津鉄工造船(株)(現在はない)には貴重な戦前の方魚津の様子を描いた絵画があった。そこには、「防波堤築造記念碑」や⑩の倉庫が描かれている。

羅老島(全羅南道高興郡)にも多くの旧日本家屋と林兼の建物が残っている。中でも、林兼の社宅、大型の製氷冷蔵工場、商事部の建物・重油タンク(いずれも現在は使用されていない)が残されている。林兼は進出した各地に商事部を設け、漁業者にサービスすることを目的とし、漁業用資材から日用雑貨までを特別価格で販売していた。発動機船への重油・軽油の提供もしていたのである。1929年には羅老島電気(株)を設立し、住民に電気を供給していた。現在の小さな漁港からは想像もつかない繁栄ぶりだった。



羅老島の旧林兼建造物、左上:重油タンク、正面:商事部、商事部の屋根の向こうに製氷冷凍工場の一部

3. 北洋漁業の挫折から南氷洋捕鯨進出

朝鮮の事業で会社の基盤を築いた林兼は北洋漁業を目指す。1927年、初のカニ工船出漁で北洋漁業に進出する。また、1933年に母船式サケ・マス漁業開始。しかし、北洋漁業には政治的な壁があり、前者は1932年に、後者は1935年に実質上、閉め出される。このことが、南氷洋捕鯨進出への強い動機になる。1934~35年の日本捕鯨(株)(のち日本水産(株))の南氷洋捕鯨成功も大きな刺激であった。中部謙吉が東京に常駐し、国産捕鯨母船建造の交渉などを行う。この急な造船計画は海軍の輸送力アップの思惑と一致し、三菱商事・大手銀行の支援を受け実現することになる。1936年に林兼は大洋捕鯨(株)を設立、同年8月に初の国産捕鯨母船=日新丸が川崎造船所で完成、10月に神戸港から初の南氷洋捕鯨に出港する。しかし船団長である志野徳助が急逝、中部利三郎が急遽指揮を執ることになる。中部家資料の捕鯨用海図はこの時のものである。翌年には第二日新丸も完成。規模を拡大しながら、1936/37年漁期から5漁期にわたり出漁する。しかし、戦況の悪化により1940/41年漁期を最後に中止。母船・捕鯨船は軍に徴用され、そのほとんどを失うことになる。母船の建造から鯨油販売による外貨の獲得、輸送船としての徴用と、日本の捕鯨は戦争と深く絡み合いながら展開していった。

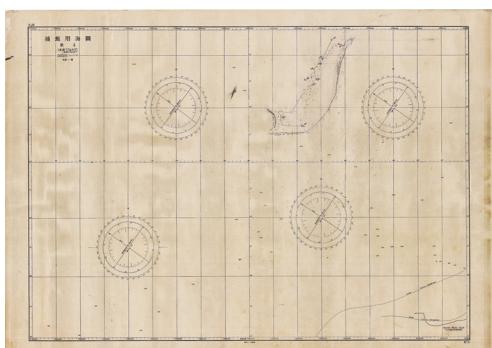
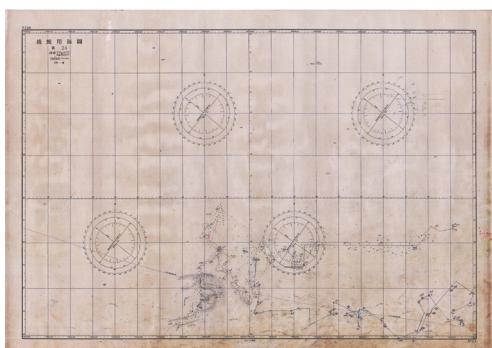
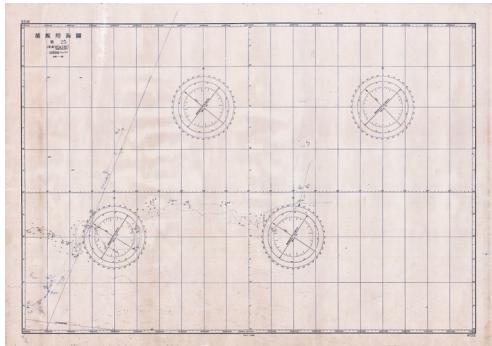
日本の水産業界のなかで日本水産・日魯漁業は初めから漁業直営で大資本であったが、林兼(のちの大洋漁業(株))は流通を基盤にしながら漁業直営に、個人経営から大資本に、という特徴がある。中部幾次郎は常に新たな漁場を開拓し、戦後の大洋漁業(株)の基盤を築き上げたのである。

新着資料紹介

今年度、旧林兼商店創業者一族の中部家より、捕鯨に関する貴重な資料の寄贈を受けましたので紹介します。

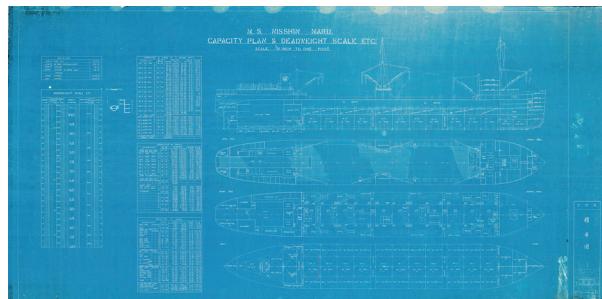
○南氷洋漁場図（捕鯨用海図）○

林兼商店の大洋捕鯨が初めて南氷洋捕鯨に出漁した1936（昭和11）年～1937（昭和12）年に使用したと推察される南氷洋漁場図（捕鯨用海図）4枚。（縦77.0cm、横107.0cm）



○捕鯨母船「日新丸」積量図○

我が国初の国産捕鯨母船として、当時の林兼商店が発注し、1936（昭和11）年に神戸市の川崎造船所（現・川崎重工業）で建造された「日新丸」積量図。



○中部利三郎 漁場日誌○

1940（昭和15）年から翌年にかけ、大洋捕鯨の「第二日新丸」事業部長として乗船した中部利三郎氏の漁場日誌。



○鯨油製造統計表○

1937（昭和12）年度に南氷洋捕鯨に出漁した日新丸製油工場の大友亮氏が記録した鯨油製造日計表。

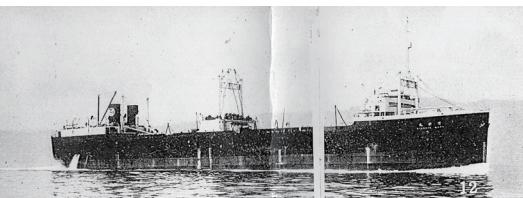


この度寄贈していただいた資料は計35点にのぼります。その一つが戦前の捕鯨の実態を知るうえで、とても大切なものです。この場をお借りし、改めて中部家に感謝の意を表したいと思います。

日新丸積量図から見える戦前の南氷洋捕鯨を検証する－調査中間報告－

下関市立大学附属地域共創センター
委嘱研究員 岸本 充弘

2015（平成27）年6月、旧林兼商店（後の大洋漁業、現・マルハニチロ）の創設者である中部家から、戦前の捕鯨関係資料等35点が



写真①(出典:『川崎造船所四十年史』)

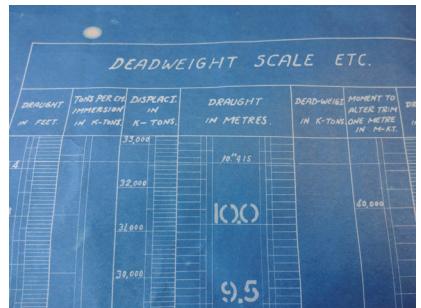
下関市立大学に寄贈された。その資料の中に、日新丸積量図と記載された古い船舶の青焼図面が1点あった。その図面には、川崎造船所造船部設計課の記載があるものの、具体的な日付や裏付けとなる記載等は一切無かったが、船の形状等から、旧林兼商店が1936（昭和11）年に建造した捕鯨母船「日新丸」（写真①）の図面ではないかと推察された。そこで、下関市立大学附属地域共創センターの助成を受け、この日新丸積量図と各種情報等から解説できる、日新丸及び日新丸が出漁した戦前の南氷洋捕鯨を検証することを試みた。そのため、2015（平成27）年8月、旧川崎造船所（現・川崎重工業）の関係者への聞き取りを行うとともに、日新丸が建造された神戸市にある神戸市文書館、神戸大学海事博物館や東京の国立国会図書館、東京大学図書館等で、日新丸に関する資料調査等を行った。

この日新丸積量図は、縦77.5cm横155.0cmの紙製の青焼図面で、右下隅の枠内に川崎造船所造船部設計課、中央上部にはM.S.NISSHIN MARU CAPACITY PLAN & DEADWEIGHT SCALE ETCとSCALE 1/16 INCH TO ONE FOOTの記載（写真②）がある。この記載によれば、積量図のスケールに関しては、16分の1インチが1フィートを表記しているということになる。また船体の側面図には、上甲板から下の部分にOIL FACTORY（製油工場）の表記が、上方から見た船体の図面には、UPPER DECK（上甲板）に続き、SECOND DECK、HOLD（船底）の表記があり、それぞれの階層ごとにボイラー等機械設備配置やタンク等の配置が記載された図面となっているが、船底のOIL TANKスペースは、NO11まであり、鯨油タンクが11区画に分けられていることが確認できる。この図面だけを見ると、母船の内部構造は鯨油製造及び鯨油タンクのスペースが多くを占めており、言わば、海上に浮かぶ製油工場と言えるものになっている。また PARTICULARS（要目）として LENGTH（長さ）535'（フィート）、BREADTH（幅）74'（フィート）、GROSS TONNAGE（総トン数）16,764.31t 等の記載がある。この積量図に関して、実際にこの図面を作製し、日新丸の建造を行った兵庫県神戸市にある旧川崎造船所、現・川崎重工業神戸造船

工場を2015（平成27）年8月21日（金）に訪問し、専門家の方々に積量図を見ていたいだいたうえ、聞き取り調査を行った。対応していただいたのは、川崎重工業（現）神戸造船工場業務部長の藤田正一郎氏ほか神戸造船工場のスタッフの皆様方であった。藤田部長によれば、「現在も、川崎重工業神戸造船所で建造した2代目日新丸の修繕に関わったスタッフがいる。昭和11年に建造した初代日新丸

は、神戸造船工場第3船台で建造されたようだが、現在その船台は無く、第4船台の隣、現在の3Bがあったあたりではないか。」とのことであった。また、

この積量図については、「CAPACITY PLAN」と記載のあるように、貨物として積む鯨油等の積載可能量を、タンクのキャパとして記載しているものであり、タンクを一元管理することが目的だが、完成図書・図面として額に入れ船内掲示して外部の方の来船時に見ていただくための一種の飾りの役割もある。」という。藤田部長によれば、「通常船内では、CAPACITY PLANをホワイトボードに直接記載したり、コンピュータで、船内のどこにどれくらいの重量の荷を積んでいるのかを管理しているが、船の場合は、荷物の有無でバラスト水をどこに入れるかを決めるため、それらの管理のために使う。また、図面右側にあるデッドウェイ尺度（写真③）は、船が沈んだ時に水を排除した部分で排水量と船の自重を引いたもので、船底からの深さに応じて水、食料、燃料等載貨重量を見るためのメモリとして使われ、現在はコンピュータ管理されているが、船が最後に竣工した時点でないと作れない完成図書である。」という。一方、この図面が1936（昭和11）年に建造された「日新丸」の積量図であることの真偽について、藤田部長は「川崎重工の社史にある船舶要目表に記載のある長さ、トン数等と数値が合致しているので、日新丸に間違いない。」との回答であった。また、この図面の記載に関する特徴のこととして、「インチ、フィート表記となっており、この表記自体戦前は使用していたが、戦時中は使っていけないのであり、戦後は使用していない。」



写真③

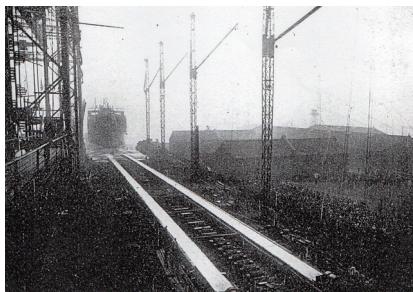


写真④

という。更に、図面に「SAWDUST STORE（おがくず倉庫・写真④）」の記載があり、「これは鯨油が漏れたとき滑らないために捲ぐのに使っていたのではないか。」とのことであった。積

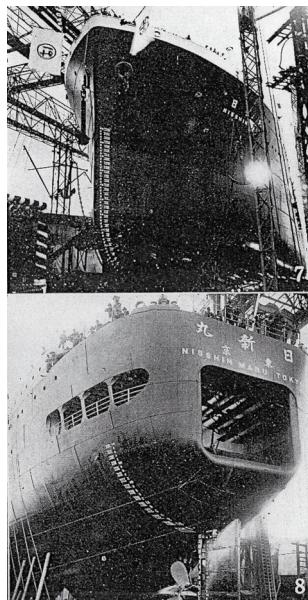
量図から見た船の構造等については、「全体的にこの造船所で建造した捕鯨母船の第二日新丸に似ている。」ということであったが、川崎重工業では1951（昭和26）年に建造した「第二日新丸」が最後の捕鯨母船で、その後捕鯨母船は建造していないという。

それでは、この日新丸建造に至る経緯と背景には、どのようなものがあったのであろうか。『神戸大学海事博物館山田コレクション資料』等によれば、我が国初の国産捕鯨母船



写真⑤(出典:『川崎造船所四十年史』)

であった「日新丸」は神戸の川崎造船所で建造され、7ヶ月という短



写真⑥(出典:
『川崎造船所四十年史』)

は、英国のファーネス・シップビルディング社建造の鯨工船 SIR JAMES CLARK ROSS の図面を林兼商店が購入したものを川崎造船所に提供し、鋼材の調達や第3船台の補強などを社内の最優先扱いで行うことで、7ヶ月という短期建造を実現できたという。日新丸船体や構造の特徴として、中央下艤に多くの油槽を持ち、船尾に巨大な鯨の取入口（写真⑥）や上甲板に解剖用甲板が設置され、製油工場にはハートマン・ボイラ4基、プレス・ボイラ24基が配置されていた。また、当時の日新丸建造の状況について、元専務取締役の山中三郎氏の「鯨工船「日新丸」の建造について」と題した手記が掲載されている。これらの原本になったのが、『川崎造船所四十年史』であり、1935（昭和10）年12月28日東京で、林兼商店専務の中部謙吉と川崎造船所専務であった元海軍中将の吉岡保貞氏が会談し、英国ファーネス造船所においては受注後15か月間を要するため、1936（昭和11）年の出漁に間に合わせるため7か月で建造を引き受けこととなった経緯が記載されている。また、日新丸の建造に携わった森本猛夫氏が、1937（昭和12）年の造船協会会報に掲載した論文「鯨工船日新丸の建造に就て」の中で、日新丸の構造、設備等に係る事項について建造に携わった技師の立場からその詳細が記述されている。その中には、製油工場だけでも1日250～300トンの大量の真水が必要になるため、優秀なる造水装置

が施されているとの記載がある。これも鯨油製造に重点が置かれていた日新丸の設備を裏付ける1つの事項であろう。ここまでして中部幾次郎が南氷洋捕鯨の進出と国産初の捕鯨母船建造を断行するに至った背景には、中部幾次郎自身の持論や種々の研究、志野徳助の助言等に加え、幾次郎自身の決断の早さがあったと言われているが、詳細はこの後、地域共創センタ一年報に寄稿することとしたい。

(参考文献)

- ・大仏次郎『中部幾次郎』、中部幾次郎翁伝記編纂刊行会、1958年。
- ・岸本充弘「下関における鯨産業発達史」下関市立大学大学院経済学研究科修士論文、2002年。
- ・岸本充弘『関門鯨産業文化史』海鳥社、2006年。
- ・岸本充弘『関門地域における鯨産業・鯨文化形成メカニズムの一考察－その将来展望を視野に入れて－』北九州市立大学大学院社会システム研究科博士論文、2006年。
- ・岸本充弘「『昭和十五年／十六年度漁場日誌』に見る戦前の南氷洋捕鯨について—中部利三郎資料より一（前編）」北九州市立大学大学院社会システム研究科『社会システム研究第10号』所収、2012年。91頁～102頁。
- ・岸本充弘「『昭和十五年／十六年度漁場日誌』に見る戦前の南氷洋捕鯨について—中部利三郎資料より一（中編）」北九州市立大学大学院社会システム研究科『社会システム研究第11号』所収、2013年。183頁～189頁。
- ・岸本充弘「『昭和十五年／十六年度漁場日誌』に見る戦前の南氷洋捕鯨について—中部利三郎資料より一（後編）」北九州市立大学大学院社会システム研究科『社会システム研究第12号』所収、2014年。135頁～146頁。
- ・岸本充弘「中部家資料『昭和十一年／十二年 捕鯨用海図』について」北九州市立大学大学院社会システム研究科『社会システム研究第13号』所収、2015年。
- ・岸本充弘「日林兼商店の創生期を検証する—中部幾次郎と廣瀬始の軌跡を中心に—」下関市立大学附属地域共創センター『地域共創センタ一年報 Vol8』所収、2015年。
- ・高浜直子『海翔ける中部幾次郎』、明石大門31所収、明石ペンクラブ、2011年。
- ・多藤省徳『捕鯨の歴史と資料』水産社、1985年。
- ・徳山宣也『大洋漁業捕鯨事業の歴史』徳山私家版、1992年。
- ・前田敬治郎、寺岡義郎『捕鯨』いさな書房、1958年。
- ・森本猛夫「鯨工船日新丸の建造に就て」造船協会会報、1937年。
- ・『明石ゆかりの人びと』、財団法人兵庫県学校厚生会、1999年。
- ・『川崎重工業株式会社社史・本史』川崎重工業㈱、1957年。
- ・『川崎造船所四十年史』川崎造船所、1936年。
- ・『鯨油及鯨革二關スル資料』農林省水産局、1939年。
- ・『神戸市史 第三集 産業経済編』神戸市、1967年。
- ・『大洋漁業』展望社、1959年。
- ・『大洋漁業80年史』大洋漁業、1960年。